

KAWASAKI **VULCAN** マフラーカタログ! 17メーカー67本一挙紹介!

World's Largest-Selling Motorcycle Magazine

Easyriders 提携誌 アメリカンバイクマガジン
[イージーライダーズジャパン]

Easyriders Japan

1998
August

No.

158

大好評ERJ特製 **特大ポスター**
長坂仁恵 & 1992 XLH1200

Japan Drag CUSTOMCYCLES

幻II

米本誌
70年代から90年代
号記念大特集
VULCAN マフラーカタログ1998
17メーカー67本集結ラウド&クールで決めろ?
ヒストリー2

パンヘッドの共演

Custom Spirit from J.S.P.

芸術品は鈍く輝く

1948FLH ART DECO PAN:genuine Museum Piece

1957FL FORTY YEARS NINE LIVESR:N.J.Biker/Builder Turns Back Time

1955FLE Billy Bike:The Real story Behind The Easy Riders Machines

名古屋BPノスタルジックカーフェア
クールブレイカー
アリゾナバイクウィーク

パーツメーカー列伝
光輪モーターズ

スペシャルペインティングヘルメット

自分だけのヘルメットを手に入れろ!

O D U C T I O N

■DATA

オーナー/富田博明
製作者/ジャパンドラッグカスタムサイクルズ(JDCC・小川泰良)
ショップ所在地/〒350-1118埼玉県川越市豊田本2253-3
電話番号/0492(46)3528
ベース車/H-D 1992 XLH1200

●ENGINE

年式・モデル/H-D 1992
エンジン/ストック
キャブレター/ストック
エアクリナー/K&N
エキゾーストパイプ/スパーパートラップ・4インチインターナル+JDC
C-カチ上げセンターパイプ
イグニッション/クレーン・Hi-4
オイルクーラー/アールズ

●CHASSIS

フレーム/JDCC・幻型
フロントフォーク/ストック
スイングアーム/JDCC・ワンオフ
フロントサスペンション/ストック
リアサスペンション/ススキ

●WHEEL & BRAKES

フロントホイール/ストック19インチ
リアホイール/アクロン・5インチ×16インチクローム
フロントタイヤ/マキシス・100/90H19F
リアタイヤ/エイボン・エランII 160/80B16
フロント&リアキャリパー/パフォーマンスマシン
フロント&リアローター/H-D バッドボーイ用
ブレーディング

フーリー/カスタムクローム・ソリッド51T

●ACCESSORIES

ハンドルバー/ドラッグバー
ヘッドライト/4.5インチミニベイツ
テールライト/JDCCスバルテール+
JDCCビレットアダプター
ウインカー/CGC
メーター/デイトナ・ホワイト
フロントフェンダー/ストックカット
リアフェンダー/VT
フェーエルタンク/ストック
オイルタンク/JDCC・ワンオフアルミバレル型
フットペグ/ストック
シート/JDCC・ワンオフ

●PAINT

ペインター/JDCC(小川泰良)
モールドペイント/JDCC(小川泰良)

1992 XLH1200

Japan Drag CUSTOM CYCLES

MARUROSHI

Photograph/Yukikazu Ikeda
Text/Takabito Honda
Graphic Play/Hirosbi Niigami

斬新な形をしたH・Dは、ショーバイクに見ることができる。きちんと走るカスタムH・Dは、ストックフォルムを保ったカスタムバイクを探せばいい。では、だれも見たことのないクールな形をしながら抜群の操縦性を持つH・Dは、果たして存在するのだろうか？

本誌97年12月号で登場したジャバンドラッグの初代、幻。そもそも、このバイクの基本コンセプトには3本の柱があった。一つ目は、スポーツスターをベースに、だれも見たことがない低く、長く、カッコいい

しなやかに走ってこそ 低く長く、カッコいいカタチ 未知のスタイルと操縦性能が共生するXLH

が変化してあそこまで過激な形に仕上げられた。つまり実際に形となった順番こそ違おうが、実は幻Ⅱが、幻という形のバイクのプロトタイプに当たるのだ。

今までにないカッコいいスタイルを表現するため、まず

フレームの再構築が行なわれた。幻型と命名されたこのフレームは、XLHフレームをチョップして製作し直されたもの。いかにパイプワークを美しく見せる

かに目的を絞った形状が特徴的だ。ヘッドライトバイザーやオイルタンクも、幻のスタイル的なアイデンティティーを確立する鍵となっている。ただ、十分な走行性能を確保するためには、バイクの基本的な形がある程度決まってしまう。その形は崩さずスタイル的なカッコよさを

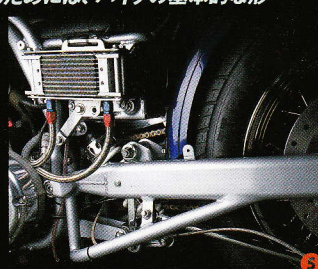
追求するために、視覚的なトリックが

多用されている。例えば高い位置にあるものを低く見せたり、大きいものを小さく見せたりといった具合に。だからこのバイクは、見た目のフォルムと、またがったときのポジションから受ける印象が違う。走って曲がって止まる、乗っても楽しいバイクに仕立てられているのだ。さらに、コストを抑えるため交換パーツは可能な限り量産品を使う。ここぞというポイントにのみ、ぜいたくにワンメイクしたパーツを必ずオゴっているのだ。全体のフォルムがカッコよければ、量産品でもOK。この辺りはビルダーのセンスの見せ所だ。

オーナーと共存するカッコいいスタイルと、十分な走行性能をうまくバランスさせるべく製作された一台のバイク。一つ一つのパーツが複雑に絡み合って完成した、幻Ⅱという巨大なジグソーパズルは、冒頭の問いに対する一つの答えなのかもしれない。

- ① ヘッドライトとスピードメーターを連結させるバイザーは、アルミのワンオフパーツ。幻Ⅱの視覚的要素のポイントであり、メーターの視認性を高めるツールでもある
- ② ネック部は、表面の鉄板をはがしパイプワークをやり直してネック角をレイク。その上で再び鉄板を貼った。ドリブルソリとフロントフォークは、ストックのものを使用。またマフラーは、スーパーラップのエキパイとサイレンサーに、ジャバンドラッグのセンターパイプをミックス。プラスト処理を施したカラーリングで、よりファットに見せる
- ③ 幻Ⅱ 独特のパイプワークを際立たせるため、あえてフレームをシルバーでペイント。スタイルはかなり変化しているが、総重量と前後輪の重量配分はストックとほぼ同じ

- ④ 幻Ⅱ のもう一つの視覚的ポイントが、3Lの容量を持つアルミ製オイルタンク。ネック角をレイクさせたことでできる空間のバランスと、全体の重量バランスを補正する
- ⑤ リアショックとスイングアーム回りは、スズキ車から移植。ストックに比べ約16cm延長されたスイングアーム下部にはスタビライザーを増設し、高速走行時のヨレを防ぐ
- ⑥ スーパーラップのエキパイとサイレンサーに、ジャバンドラッグのセンターパイプを組み合わせたマフラー。プラスト処理を施したカラーリングで、より太く、武骨に見える
- ⑦ ストックのタンクは、3本に別れて伸びるフレーム幅を広く取ることで、小さく見せている。上部から眺めると、細身だがどこか武骨さにあふれたボテラインが分かる





LOCALS ONLY
1977 SHOVEL HEAD



SAMURAI
1963 XLCH



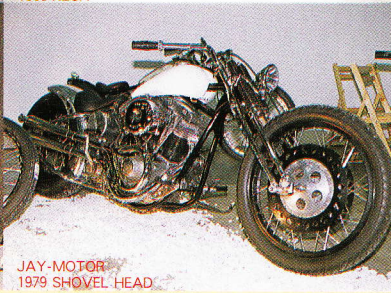
DRAG☆ON
1956 FL



MECHANICAL EAGLE CUSTOM CYCLES
K-SPECIAL (1981 WIDE GRIDE)



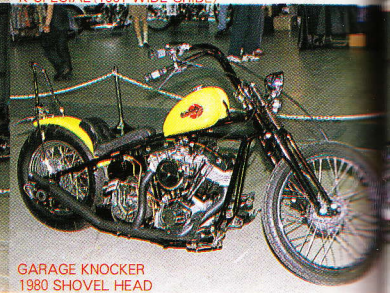
MOTO-COM
FREE TOMORROW (1983 FLH)



JAY-MOTOR
1979 SHOVEL HEAD



JAPAN DRAG CUSTOM CYCLES
2711 (1992 XLH1200)



GARAGE KNOCKER
1980 SHOVEL HEAD



カスタム

5月24日、神奈川県横浜市のパシフィコ横浜で「クールプレーカー・カスタムサイクルショー」が開催された。このイベントは、カスタムハーレーとVツインエンジン搭載のコンプリートバイクに出展車を限定した、本格的なカスタムサイクルショー。カスタムハーレーショーとしてスタートした初期のハーベストタイムの意志を継ぐイベントとして、ホットドックの河北さんをはじめとするクールプレーカー実行委員会により企画されたものだ。短い準備期間にもかかわらず、今回のショーのために製作されたカスタムバイクから、各専門誌に登場したバイクまで、国内の主要カスタムショップの力作が集結。全国40軒を超えるカスタムショップから、100台以上のカスタムバイクが展示された。会場の外ではフリーマーケットも開催。午後から雨が降り出すあいにくの空模様ではあったが、会場を訪れた約2500人のハーレーフリークたちが、幸福なハーレーの休日を楽しんだ。

現在の日本のハーレーカスタムシーンでは、ノスタルジックなカスタムの人気がとても高い。しかし、会場でも様々なバイクを一度に見て気付いたことがある。ハイパフォーマンスなパーツが組み込まれたカスタムバイクが意外と多いのだ。と言ってもアメリカのハイテック系カスタムが、そのまま再現されているわけではない。ベースエンジンの形式はエボリューションに限らず、ノスタルジックなスタイルをベースとしたモデルも多い。アメリカでは主流を成すハイテック系のカスタムが、日本人ビルダー独自のセンスで表現され、新しい流れとして国内のシーンにも序々に浸透して来ているのだろうか。

来年度以降も開催が予定されているクールプレーカー。この超強力イベントの、今後の展開がとても楽しみだ。